

## 栗ヶ沢バプテスト教会 26-02-22 主日礼拝説教

### 「キリストを伝える」フィリピ1:15-19

木村一充牧師

この朝お読みいただいたフィリピの信徒への手紙は、パウロが第2回伝道旅行で「マケドニアの叫び」を聞き、エーゲ海をわたってギリシャに上陸し、最初に訪れたマケドニア第一の都市であるフィリピの町で立ち上げた教会の信徒たちに書き送った手紙です。この手紙を書いた時、彼は獄に捕らえられていました。場所はエフェソだったのではないかと見られます。ところが、本日のすぐ前の1章12節を読むと、パウロの入獄が、伝道活動の中断や、福音宣教の後退につながる痛手となることもなく、かえって逆に福音の前進に役立ったと書かれています。このことは不思議なことに思われますが、パウロの信仰者としての生きざまを考えると、十分ありうるだと思われます。かつて、パウロはこのフィリピの町で獄に入れられたことがありました。使徒言行録16章に次のような言葉があります。「真夜中ごろ、パウロとシラスは神に祈り、賛美を歌い続けたが、囚人たちは耳を澄まして聞きいつていた」ふつう獄に入れられたら、歌を歌う気分になどならないものです。しかし、パウロとシラスは真夜中の牢獄にあっても、熱心に神に祈り、賛美の歌を大きな声で歌ったのです。すると、他の囚人たちもその讚美の歌を耳を澄まして聞きいつたとあります。真夜中の今は寝る時間だから、黙っているという人はいませんでした。真っ暗な、まったく絶望的な牢獄の中に捕らわれの身として閉じ込められている彼ら囚人たち。そのような状況で、そこに心から神を賛美し、また熱心に祈る人の姿があったとすれば、私たちも、思わず耳を澄ませて聞きたくするのではないのでしょうか。先週の賛美歌を歌う会でも、一人の方が前に立ち、ソロで「いつくしみ深き」という賛美歌を歌われました。歌い終わると、拍手がわきがりました。パウロにとって、いつどのような時でも、信仰に生きるその姿は変わらなかったのではないのでしょうか。彼は、いっさいを神にゆだね、神の恵みによって生きることだけを考えて生きていたのです。

しかし、パウロにとって当たり前であったそのことが、信仰をもたない周りの人にとっては驚くべきことであったのにちがいないのです。ここに一人のみずぼらしい人がいるが、この人は何か不思議な力によって支配されているようだ。牢獄に入れられているのに、少しも打ちひしがれてないどころか神を賛美している。この人はただ者ではない。そう思われたことでしょうか。一方で、信仰を持っている人たちから見たらどうでしょうか。いくらあの方が偉い先生だといっても、牢獄の中では何もできないだろう。われわれの教会もこれでもう終わりかもしれない、そう考える人さえいたかもしれないのです。ところが、実はそうではないことが知れ渡った。パウロが獄に入れられたことで、それがキリストのためであることが兵営全体に知れ渡り、兵士たちもパウロの説教を聞くことになった。多くの兵士たちがパウロの語る福音に心を打たれたことでしょうか。こうして、パウロが獄に入れられたことが、兵営全体で噂になり、それがフィリピの教会の信徒たちにも伝わって、わたしたちもパウロ先生に倣おうということになったのでしょうか。パウロの入獄が、かえって福音の前進に役立ったのであります。

室町時代の能楽師である世阿弥元清という能の名人が次のようなことを述べています。どれほど長く修練を重ねた能の舞い手でも、やはり本番で舞い違える時がある。しかし、本当の名人は、その舞い違いによって、かえってその能の味わいをますます妙なるものにする、そういうのです。普通であれば、間違いによってその舞いに傷がつきます。しかし、名人と呼ばれる人は、その間違いを逆手にとって舞いを深める、そこまでいかなければ本当の名人ではないと世阿弥は言うのです。パウロがここで書いていることは、自分はそのような名人だということではありません。そうではなく、神がそのことをなしてくださるということです。すなわち、人間の目には決してよいように見えないことでも、神はそこにおいて働かれ、神を求める者のために物事を良い方向へと導いてくださるということです。これこそ、神を信じる者の醍醐味ではないでしょうか。

そこで、本日お読みいただいた手紙の内容へと移っていきます。パウロの入獄はフィリピ教会の信徒たちにとって刺激となりました。しかし、フィリピの教会には、残念ながらパウロの教会への影響力に対して批判的、敵対的な人たちがいたようです。パウロはその人たちを後の3章2節で「あの犬ども」というとても激しい呼び方をもって非難しています。彼らは割礼を誇るユダヤ人キリスト者であったことがそのあとに書かれています。これらの敵対者たちとパウロとの間には、福音の理解について、また教会のあるべき姿について大きな違いがありました。パウロの敵対者たちはキリストを信じることの大切さを説きながら、一方でこの世のこと、身分や地位、またこの世の誉れをも大事にする、靈的に未成熟な人たちだったのではないかと見られています。同じ3章でパウロはこの人たちのことを「キリストの十字架に敵対する者」とまで言っています。この言葉は、直接的には律法順守を唱えたユダヤ主義者のことを指していると思われませんが、今日風にいえば次のような人たちでしょう。生まれ変わっていない人、キリストよりもこの世のことに、より大きな関心を持っている人、キリストを第一にした生活をしない人です。そのようなものを指して「彼らは

腹を神としている」とパウロは言います。キリストを喜ばせるより、自分を満足させたい、自分を満たしたいと思っている人たちです。これはフィリピ教会だけの問題ではありません。信仰生活の一番の物差しは、これを行ったら、果たして神さまが喜ぶだろうか？ということです。何が神の御心であるかを知るためにも、私たちは神の前に謙遜でなければなりません。

フィリピの教会にはパウロを慕い、パウロを愛している人々がいました。彼らはパウロの入獄という現実を前にして、なおその事態も前向きに捉えようとしていました。彼らは、「今パウロ先生が獄に入れられているのは、神がそのことを通して福音を弁明する機会を先生に与えられたからだ。そのことを喜び、残された自分たちは、この教会で福音を精一杯宣べ伝えよう」と善意と愛の心をもって、周りの人々にキリストの福音を伝えようとしたのです。しかしその一方で、フィリピ教会の中には、パウロの敵対者もありました。彼らは、パウロが牢獄に入れられたことをこれ幸いと受け止め、意地悪な気持ちで、パウロを苦しめようとしてキリストを宣べ伝えようとしたのです。つまり、教会の中での発言力や影響力を強めるために、パウロの入獄はまたとないチャンスと見て、福音宣教によって自分たちの勢力を拡大しようと考えたのです。本日の手紙のなかのパウロの言葉（1：17）を借りると「自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせている」というのです。獄にいる自分を苦しめようとして伝道している残念な人がいるとパウロは言うのです。しかも、そう考える彼らも信仰者です。聖書は、決して都合な事実にくちかぶりを加えず、それを覆い隠すようなことはしません。そうではなく、それを明記して、教会といえども神の前に完全な人間はいないということを明らかにするのです。

ところで、ここで「不純な動機」と訳されているもとのギリシャ語（エリセイア）ですが、（以前の口語訳では「党派心」と訳されていました）元々の意味は決して悪い言葉ではありませんでした。それは「賃金を得るために働くこと」「報酬を求めて働くこと」という単純な言葉でした。そのことは軽蔑されるようなことではありません。ところが、賃金のためにだけ働く人は、いつしか人を押しのけてでも利益を得ようとするところから、この言葉が「目的のためには手段を選ばない卑しい心」を意味するようになったのです。平たくいえば、パウロの敵対者たちは教会の中で、自分たちの勢力を拡大しようと妬みや党派心から福音を宣べ伝えようとしたわけです。

しかし、驚くべきは、これを伝え聞いたパウロの態度です。パウロは次のように手紙に書きます。「だが、それが何であろう。口実であれ、真実であれ、とにかくキリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいます」自分のことを悪く言う人の教えを聞き、それによって新たに救われる人がフィリピ教会の中で起こされたら、普通の牧師であれば「勘弁してくれ」ということになるかもしれません。しかし、パウロは「わたしはそれを喜んでいて、これからも喜ぶ」というのです。なぜでしょうか。それは、神のために働く伝道者として、神は完全無欠な立派な人を選ばれるわけではないということ、パウロが知っていたからです。パウロ自身のことを考えてもそうです。かつては、キリストの敵対者、ファリサイ派のユダヤ人として教会を迫害してきた人間です。そんな弱さや欠点を抱えながら、自分自身が赦されて救われたのだから、ほかの人のことを聞いて、「彼らに福音を語る資格などない」とは言えない。動機がどうであれ、キリストが宣べ伝えられているのであれば、それはそれでよいではないか、とパウロはいうのです。救われる人がおこされるのであれば、誰が、どのような動機で福音を告げ知らせたかは、二の次の問題だとパウロは考えていたのです。

往々にして、私たちは教えよりもその人の人間性、人格を選ぶ弱さを持っているのではないのでしょうか。教えよりも教えを説く人の人間性に魅力を感じてしまうのです。しかし、その人の人間性を選ぶことは結局、自分にとって好ましいものを選ぶことになりかねません。パウロが、今日の箇所ですべて述べていることは、誰が福音を伝えようと、キリストが正しく伝えられ、そこで語られた言葉がその人を救うのであれば、自分はそれを喜ぶということです。キリストが正しく宣べ伝えられているならば、確かに救われる人が起こされるはずですが、そのことが「いの一番」に大事だとパウロはいう。しかし、だからといって救われる人が起こされれば動機はどうでもいいと考えていたわけではありません。そのことは、フィリピ書の2章の始めのところで「めいめい自分のことばかりでなく、相手のことも考えなさい」と書かれている言葉からもわかります。

「キリストを宣べ伝える」とは、イエス・キリストがいつどこに生まれて、どのような生涯を歩み、いつ頃亡くなったかを告げるものではありません。そうではなく、この人が私に起こしてくださった救いを宣べ伝えるのです。マルコ福音書の5章に出てくるあのゲラサの病人を癒されたときに、主イエスは言われました。「自分の家に帰りなさい。そして、主があなたにしてくださったことをあなたの家族に伝えなさい」全世界に出て行く必要はありません。自分の身近な人にキリストを伝えるのです。2026年度の教会の歩みが、ひとりでも多くの人にキリストの救いを宣べ伝える歩みとなるように祈る次第です。

お祈りいたします。